慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Th. マン『ファウストゥス博士』第31章に引用される物語を追って
Sub Title	Über die Geschichte Von der gottlosen List der alten Weiber, die im Kapitel XXXI Thomas Manns Doktor Faustus zitiert ist
Author	西村, 正身(Nishimura, Masami)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.169- 188
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Th. マン『ファウストゥス博士』第 31 章に引用される物語を追って

西　村　正　身

トーマス・マン『ファウストゥス博士』（1947 年）第 31 章で，アードリアーンはシルトクナップを通じて知った「中世の大部分の浪曼的な神話の源流とみなされているこの古い書物，最も古いキリスト教説話伝説集のラテン語からの翻訳」である『ゲスタ』から，その「説話のいくつかを，圧縮した形で，人形オペラとして音楽化しようと」試みる[1)]。その候補となる説話のひとつは，のちに『選ばれし人』となる「グレゴリウス」であるが，もうひとつをマンは次のように紹介する。

> そこには，例えばまことに不道徳な，デカメロンに先行する物語『老婆の世にも不埒な奸計のこと』があるが，この物語の中では，信心を装いながら道ならぬ恋のとりもちをする遣り手婆が，ある高貴な殊のほか貞淑ですらある人妻を，彼女を信じきっている夫が旅に出ている隙に口説き落して，彼女に恋い焦がれている若者に罪深くも思いを遂げさせる顛末が語られている。すなわちこの魔女は，飼っている小犬に二日間餌をやらずに飢えさせて置き，それから芥子を塗ったパンを与えたので，

1）Thomas Mann, *Doktor Faustus*, hrsg. und textkritisch durchgesehen von R. Wimmer, S. Fischer Verlag, Große kommentierte Frankfurter Ausgabe, Band 10.1, 2007, pp. 459–461. 引用は『トーマス・マン全集Ⅵ』円子修平訳，新潮社，1971 による。以下同じである。

犬はとめどもなく涙を流す。こうして置いて魔女は，この牝犬を連れて操正しい貴婦人のところに出かけて行くが，彼女は皆に，この貴婦人にも，信心深いと思われているので，鄭重に迎え入れられることになる。さて，貴婦人は泣いている小犬に眼をとめて，不思議に思ってそのわけを尋ねると，老婆は初めはこの問いを避ける素振りを見せるが，やがてやむなく語り出し，実はこの小さな牝犬はわたしの娘なのですが，あまりに貞淑すぎて，彼女に恋い焦がれている若者を頑なに拒み続けたために若者を死に追いやる羽目になり，その罰としてこの姿にされてしまい，それからは犬になり果てたわが身を悔んでこうして絶えず涙を流しているのです，とまことしやかに打明ける。このように底意を潜めた偽り言を述べ立てながら遣り手婆も涙を流して見せる，貴婦人は罰せられた娘の場合と自分の場合とが酷似しているのに仰天して，自分に恋い焦がれている若者のことを老婆に打明けると，老婆はもしあなたも牝犬に姿を変えられたりしたらなんという取返しのつかない災難でしょうと深刻な未来図を描き出して見せ，ついには，神様の御旨のままにあの人の情欲を鎮めてあげねばなりますまい，恋に窶(やつ)れているあの人を連れて来てくださいと頼まれることになり，こうして二人は世にも不埒な企みによって甘美きわまる姦通を祝うのである。

マンがこの物語をどこから採ったかは作品中に，『ゲスタ >Gesta<』からであると明らかにされている。『ゲスタ』とは，13 世紀末から 14 世紀初めにかけてラテン語で書かれた説話集『ゲスタ・ロマノールム』のことである[2)]。引用される物語はその第 28 話。マンはグレーセのドイツ語訳を読んだと思われる[3)]。先に引用した『ゲスタ』の紹介文のうち「この古

2）H. Oesterley, ed., *Gesta Romanorum*, Berlin 1872. 邦訳は伊藤正義訳『ゲスタ・ロマノールム』篠崎書林（昭和 63 年），永野藤夫訳『ローマ人物語』東峰書房（1996 年）。

3）*Das älteste Mährchen= und Legendenbuch des christlichen Mittelalters,*

い書物，最も古いキリスト教説話伝説集のラテン語からの翻訳（diese Übersetzung der ältesten christlichen Märchen- und Legendensammlung aus dem Lateinischen」という表現もグレーセによる書名を意識したものであるし，物語のタイトル「老婆の世にも不埒な奸計のこと」が *Von der gottlosen List der alten Weiber* で一致しているからである。ラテン語によるタイトルも同じ意味の De inexecrabili dolo vetularum である。

本稿はこの物語がどこから来たかを追う試みである。

『ゲスタ』はこの「老婆の世にも不埒な奸計のこと」を，スペイン生まれで，キリスト教に改宗したユダヤ人ペトルス・アルフォンシの『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』（1106 年頃）から採った。直接『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』からではないかもしれないが，行き着くところはそこである。その例話 13 がそれで，次のような物語である。

例話 13　涙を流す小犬

ある貴族にたいへん貞節で美しい妻がいた。たまたま夫は祈りを捧げにローマへ行きたくなったのだが，妻には当人以外のいかなる保護者をもつける気はなかった，その汚れのない人柄と誇りともいえる誠実さを心から信じていたのだ。夫は同行者を見つけると旅立っていった。あとに残った妻は清らかに暮らし，何事においても注意深く振舞っていた。

ところがあるとき，必要に迫られて隣りに住む夫人を訪れるために家を出た。用事を済ますとすぐにまた家に帰った。そのときにその姿を見かけたある若者が燃えるような恋心を抱き始め，熱い想いを寄せる彼女からも愛されたいと願って，彼女に何通もの恋文を出した。彼女はそれを受けつけず，男をぜんぜん相手にしなかった。そこまで軽

---

oder die Gesta Romanorum, von J. G. Th. Gräße, Zweite wohlfeilere Ausgabe, 1847/Rpt. Sändig Reprint Verlag, 1984, pp. 54–57.

蔑されていることを知った若者は悲嘆にくれて，とうとう重い病にかかってしまった。それでも彼は，もしかしたら会えるかもしれないと思いこがれて，あの愛しいひとが出てくるのを見た場所へ何度も足を運んだ。けれども，一度として願いは実現されなかった。悲しみのあまりに涙を流していると，そこへ修道服に身を包んだ老婆がやって来て，あなたをそれほどの悲しみに駆り立てている原因はいったい何なのかと尋ねた。しかし若者は決して心のなかにあることを打ち明けようとはしなかった。彼に老婆が，「病を医者に見せるのを先に延ばすと，ますます重くなって精も根も尽きてしまうものですよ」。その言葉を聞いた彼は，わが身に起こったことを順を追って話し，心の秘密を打ち明けてしまった。老婆が，「今お話しして下さったことから，神のお力をお借りして，何か治療法を探してみましょう」。そう言うと彼を残して家に帰っていった。

そして家で飼っていた雌の小犬に二日のあいだ絶食させ，三日目に芥子を塗って仕上げたパンを空腹の犬に与えた。さて，それにかぶりついた小犬はそのあまりの辛さに目から涙を流し始めた。そのあとで老婆は，さきほどの若者が心底から惚れ込んでいる貞節な女の家へと出向いていった。そしてたいへん信心深そうなその外見のおかげでうやうやしく迎え入れられた。小犬は老婆についてきた。その小犬が涙を流しているのに気づいた女は，いったいどうしたのか，なぜ泣いているのかと尋ねた。すると老婆が，「親愛なる奥さま，どうしてなのかはどうかお尋ねにならないで下さいまし，悲しみがあまりにも大きいものですから，お話しすることなんてできないんでございますよ」。女は，どうか話してほしいとなおさら熱心に頼んだ。老婆は語り始めた，「ごらんになっているこの小犬は，わたしの娘だったのでございます，とても愛くるしい娘でした。この娘にある若者が恋をしたのでございます。ですが，あまりにも汚れを知らぬ娘だったものですから，そのかたをまるで相手にせず，その愛をはねつけたのでございます。

その罪の報いとして，かわいそうに娘は小犬に姿を変えられてしまったのでございます」。そう言うと，深い悲しみのあまりに老婆はわっと泣き出した。

すると女が，「わたしはどうしたら，親愛なるおばあさん，同じ罪を犯したことに気づいたこのわたしはどうしたらいいのでしょう？わたしもある若者に愛を打ち明けられたのですが，貞節が何より大事とはねつけましたら，今のお話と同じことがそのひとの身に起こったのです」。老婆が彼女に，「親愛なる奥さま，できるだけ早くそのかたのことを思いやっておあげになり，そのかたが望んでおられることをしてさしあげなさいませ，奥さままで同じように犬になってしまってはいけません。さきほど申しました若者とわたしの娘の愛にもしわたしが気づいておりましたら，娘は姿をかえられずに済んだでしょうに」。貞節な女が老婆に，「どうかお願いですから，何かこのことに役立つ助言をして下さい，今の姿を奪われて小犬になんかなりたくないわ」。老婆が，「神への愛のために，わたしの魂の償いのために，それに奥さまがお気の毒ですから，喜んでさきほどおっしゃった若者を探してさしあげましょう，どこかで，見つかりましたら奥さまのところへ連れ戻してきてさしあげますよ」。女は老婆に感謝した。かくして策略に富んだ老婆は若者を連れ戻し，こうして，ふたりを結びつけたのだ[4)]。

ペトルス・アルフォンシは『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』を，「一部は賢者たちの格言や訓戒から，一部はアラビア人たちの格言や訓戒，物語や詩から，一部は動物や鳥の寓話から採って編んだものである」という。問題の例話 13「涙を流す小犬」も「アラビア人たちの…物語」から

4）*Die Disciplina Clericalis des Petrus Alfonsi*, hrsg. von A. Hilka und W. Söderhjelm, Heidelberg, 1911. 引用は次の邦訳による。西村正身訳『知恵の教え』溪水社（平成 6 年）48–51 ページ。

採られたものであると推測されるが，J・トウランはその源を『シンドバード物語』としている[5)]。

『シンドバード物語』とは，次のような物語である。

老齢の王に念願の後継ぎが生まれる。占星術師が，この子はある年齢のときに死の危険に見舞われるが，無事に乗り越えるであろうと予言する。適齢に達すると王は王子をシンドバードに託して教育させるが，成果が上がらない。期間を限定して再度教育を任されたシンドバードは王子の教育を完了し，王子が王宮に戻る約束の日の前夜，星占いをする。すると，7日間，もしひと言でも口をきけば死ぬ運命にあるという結果が出る。シンドバードは王子に7日間の沈黙を命じ，自分は姿を消す。宮廷に戻った息子に王はいろいろと質問するが，王子は沈黙を守る。皆が途方に暮れているとき，王の愛妾のひとりが現われ，王子を預けてくれたら沈黙の理由を聞き出してあげると言う。許しを得た愛妾は王子を自室に連れて行き，恋心を打ち明けたうえで，老齢の王を殺してふたりで王国を乗っ取ろうと持ちかける。激怒した王子は約束を忘れて，7日経ったら後悔させてやると口走ってしまう。身の危険を感じた愛妾は服を引き裂き，髪をかきむしり，顔をひっかいて叫びを挙げ，王に讒訴する。王は王子の処刑を命じる。それを知った7人の大臣たちは，王はあまりにも性急であるし，女の証言をすぐに信じるのも愚かなことであり，もし王子が無実であったら大変なことになると考え，王に性急さと女の策略についての物語をして処刑を思いとどまらせようと相談する。さっそく第一の大臣が死刑執行人のもとへ行って処刑を中止させ，その足で王を訪れて，性急さを諌める物語と，女の策略についての物語をする。それを聞いた王は処刑を思いとどまる。翌日，そのことを知った愛妾は王のもとに行き，男

5）John Tolan, *Petrus Alfonsi and His Medieval Readers*, University Press of Florida, 1993, pp. 79f.

が当てにならず，その心には裏切りが潜んでいるという物語をして王子の処刑を促す。王は再び王子の処刑を命じる。するとまた次の大臣が物語をして……ということで，これが 7 日間繰り返され，8 日目に口を開いた王子が真相を語り，愛妾は罰せられる。

『シンドバード物語』は西アジアで流行し，シリア語，アラビア語，ギリシア語，ヘブライ語，スペイン語，ペルシア語などで書かれた版が今に伝わっている。ヘブライ語から訳されたラテン語版もある。祖本は失われてしまっている。問題の「涙を流す小犬」はそのすべての版に含まれているが，未解決の微妙な問題も残されている。ペトルス・アルフォンシが「アラビア人たちの…物語」から採ったと言っているので，『シンドバード物語』アラビア語版の「涙を流す小犬」を見てみよう。アラビア語版『シンドバード物語』は『アラビアン・ナイト』に含まれる版が 3 種知られているが，いずれもいくらか後の版であるので，ここでは『アラビアン・ナイト』とは別に伝承されてきたアラビア語版『王冠を戴く王と王妃と賢人シンドバードと七人の大臣の物語』所収の第 11 話（4 日目に第 4 の大臣が語る第 2 の物語）を紹介しよう[6)]。

ある男に美しい妻がおり，二人は，互いに相手を大切にし，決して裏切らないと固く誓い合っておりました。やがて男は旅に出ることになり，約束した期日までの十分な生活費を手渡して，こう言いました，「その期日よりも前に旅から帰ってくるからね」。

こうして彼は旅立ち，妻は留守を守っていたのですが，とうとう約

6）*Sindbād-nāmeye 'arabī: hikāya al-malik al-mutawwaj ma'a imra'a al-malik wa al-ḥakīm al-Sindbād wa sab' al-wuzarā'*, in *Sindbād-nāme yazan Muḥammed b.'Alī Aẕ-Ẓahīrī As-Samarqandī Arapça Sindbād-nāme ile birlikte*, Mukaddime ve haşiyelerle neşreden Ahmed Āteş, Istanbul, 1948, pp. 347–388. 第 11 話は pp. 366–368.

束の期日も過ぎてしまい，生活費も底をついてしまったのです。それで彼女は夫の友人たちに夫のことを尋ねて回りました。そうした折に，ある男が彼女を見かけて心を奪われてしまい，近所に住む老婆を呼んでその女ことを尋ね，彼女に寄せる思いを訴えて，こう言いました，「おれと彼女を結びつけることができるかい，何でもあんたの欲しいものをあげるからさ」。すると（老婆が）言いました，「安心して，楽しみに待っていておくれ！」

それから老婆は小麦粉を用意し，それを脂と胡椒でこねて，パンを作りました。

ところで，老婆は家で，どこかへ出かけるときにはいつでもそのあとについてくる雌犬を飼っていたのですが，その犬に胡椒で〈こねた〉パンを与えて，夫が留守をしている例の人妻の家に出かけました。もちろん犬もいっしょです。夫人は，何の用ですかと尋ねました。老婆はしばらくそのそばにすわり込みました。やがて，そばにいる犬が泣き始め，涙がその目からこぼれ落ちてくると，老婆も泣きだし，哀しい顔をしたのです。女主人が言いました，「あら，お婆さん，いったいどうしたんですの，この犬も泣いているし，あなたも泣いているなんて？」すると老婆は，首を振ってこう言いました，「ああ，娘さん，この犬の不幸のことは，どうか慈悲深いアッラーに聞いてくださいな！」娘が言いました，「いったいどんな不幸だったんですか？」それを聞いて老婆が言いました，「ああ，娘さん，この犬はね，女たちの中でもいちばん美しくて，たとえようもなく愛らしい娘だったんですよ。ある男が想いを寄せて，熱をあげ，どうか自分に目を向けてほしいと頼んだのだけれど，この娘はそれを受け入れなかったのさ。ところが，その男がまた魔法使いでね，彼女に魔法をかけたもんだから，あんたが今目にしているような雌犬にされてしまったんだよ。それが若い娘さんを見たもんだから，わが身を悲しんで泣いているのさ」。すると，娘がこう言いました，「本当の話なんですか？」老婆は，

その話が本当だということを，千回も誓いました。娘が言いました，「ああ，お婆さん，ここにもわたしにすっかり熱をあげている若者がいるんです，わたしもその人を受け入れなかったんです。魔法をかけられて，このような雌犬にされちゃうんじゃないかと思うと，恐くてたまらないわ」。そこで老婆が言いました，「アッラーにかけて，そのとおりだよ，娘さん。その人はそのことであなたを許してはくれませんよ」。すると，娘が言いました，「急いでわたしとその人を結びつけることができますか？」老婆が言いました，「もちろんだよ，わたしが知らせてやろう，たとえ誰だか分からなくてもね」。娘が言いました，「うれしいわ」。「わたしがその人をあんたのところに連れて来てやるよ」。そう言うと（老婆は）すぐに立ち上がり，頼まれたことをしに出て行ったのです。娘のほうはというと，ほっとして，若者が訪れてくるのを待ってすわっていました。

老婆は若者を捜したのですが，会えませんでした。くまなく捜したのですが，とうとう知らせることができなかったのです。ところが，運命の指図によって，その娘の夫がちょうどその時間に旅から戻ってきたのです。その夫人の夫は感じのいい性格で，美男子でした。彼を見た老婆は，その美男子振りが気に入ってしまい，こんな独り言を言ったのです，「頼んできたあの若者に会えなかったんだから，あの旅人を代わりに連れて行くとしよう，あの娘に恥をかかせるわけにはいかないからね」。そして，娘の夫に近づいてこう声をかけました，「お若い方，きれいで魅力的で優雅な若い娘はいかがですか？　姿かたちはいいし，おっぱいは（大きいし），夫はいないし，脚も腕も（すらっとしていて），たとえ（アッラーの）崇拝者であっても，見た者をとりこにしてしまう娘ですよ」。若者は彼女に心をひかれ，ちょうどそのときはなにもすることがなかったので，こう言いました，「願ってもないことだ！」

すると（老婆が）前を歩き始めたので，路地から路地へとそのあと

についていくと，やがて若者の家のドアのところで彼を止めたのです。若者はこう独り言を言いました，「これが，アッラーにかけて，おれが留守にしているときにいつもあいつがやっていたことだったのだ。それにこの老婆，こいつがあいつを操っていることは間違いない」。内心はもうひどいことになっていました。それから若者は自分を慰め，老婆がすることを見ていました。老婆は辛抱強く待っていましたが，（やがて）娘が知らせて，こう言いました，「お婆さん，あとはわたしにまかせて，入ってもらってちょうだい」。そう言うと彼女にいくらかを支払いました。それから彼女が出て行くと，（妻は）若者に声をかけました，「お入りください！」若者は，怒りを感じながら中に入っていきました。妻はそれが夫であることに気づき，自分がとんでもない窮地に陥ったことを知ったのですが，悪魔がひらめきを与えて注意深くさせたので，彼女は飛びかかっていって夫の顔に平手打ちを食らわせ，服を引き裂き，あごひげを引き抜き，その振舞いで度肝を抜いてから，こう言い放ったのです，「この女ったらしめ，誓いと信頼はどこへ行ったのよ，変なことはしないって約束したんじゃないの？あんたがこういうことをしてるって，噂に聞いたわ，でも今日あんたが帰って来たって知らされるまでは信じなかった。それを聞いて，あの老婆をあんたのところに行かせて，今日あんたをだますように命じたのよ。そうしたら，すぐにあとについて来て，約束や誓いのことなど忘れちゃったんじゃないの！」かくして奥さんの策略に不意打ちを食らった夫は，言い逃れようとしたり，なだめたりしようとし始め，「アッラーにかけて，妻よ，おれが留守のときにいつもお前がこういうことをしていたんだと思ってしまったんだ」と言ったりしたのです。それからも夫が機嫌をとりつづけたので，奥さんも策略を駆使して機嫌を直し，やっとのことで納得したのです。

さて，この物語が『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』の物語と同

じモチーフを持っていることに，誰も異論はないであろう。しかし，後半に大きな違いがあることに，誰もが気づくことであろう。果たして，ペトルス・アルフォンシはこの物語の後半を自分なりに書き換えたのであろうか？　ペトルス・アルフォンシは「涙を流す小犬」を含む例話 9 から例話 14 までの 6 話を，「女たちの悪巧み」を教えるために書いている。これまで紹介した 2 つの「涙を流す小犬」のうち，女たちの悪巧みをよく表わしているのはどちらの物語であろうか？　それは『シンドバード物語』所収のものであると断言しても，異論を唱える者は誰もいないであろう。

もう一度同じ問を発してみよう。ペトルス・アルフォンシは『シンドバード物語』所収話を見て，その後半を書き換えたのであろうか？　答えは，否である。もし書き換えたのだとしたら，文学的な才能はまったくなかったことになろう。だが，彼の名誉のために言っておくが，そうではなかった。彼はここに紹介したようなアラビア語版『シンドバード物語』所収話を知らなかったのだ。もし知っていたとしたら，間違いなくこちらを選んでいたであろう。では彼は，どこから「涙を流す小犬」を見つけ出してきたのか？

先に，「涙を流す小犬」は東洋系『シンドバード物語』のすべての版に含まれていると書いた。だが，詳細に見ると，東洋系『シンドバード物語』の中に 2 種の「涙を流す小犬」の存在を確認できる。ひとつはすでに紹介したが，もうひとつは次のようなものである。

> （ペルシアのフージスターンにある）シュースタルの町に陽気で若い，女好きの男がおり，ある日，狩りをしようと馬に乗って出かけたときに，格子窓にたたずむ妖精のような顔をした娘を見かけて，たちまち恋に落ちる。男はずる賢い老婆に，その愛しい人を取り持ってくれるよう頼むが，夫人は腹を立て，言い寄る男を楽しませるなんてとんでもないことと拒絶し，取り持ちの老婆を追い返す。しばらくあと，

老婆は熱心な信者になりすましてその家に入り込むことをたくらむ。すぐさま召使いたちの信頼を勝ち取り，ついには夫人その人とも親しい友だちになってしまう。ある日，狡猾で偽りに満ちた老婆は，その夫人が飼っている雌犬に，とてつもなく辛い味付けをしたケーキをひそかに食べさせる。そのせいで，犬の目からは，まるで泣いているかのように涙があふれ出てくる。それに気づいた夫人はびっくりし，老婆にその訳を尋ねる。最初のうち老婆は，犬が泣いている理由を説明するのを嫌がる振りをし，何度も頼まれた末にやっと，実はこの犬は昔はきれいな娘さんで，言い寄る男の求愛をはねつけた罰としてこんな姿に変えられてしまったのだ，と夫人に話す。その話を聞いて不安になった夫人は，ある老婆を通じてわたしに言い寄ってきた若者の頼みを断ってしまったのだ，と打ち明ける。そして，でも今は，同じようにして雌犬に姿を変えられてしまうことのないよう，いつでもその人と会うつもりだ，と言い添える。ずる賢い取り持ち婆は恋する若者のもとへ急ぎ，策略がうまく功を奏したことを伝える。そのすぐあと，夫人とその情夫は身ひとつとなる[7)]。

この物語が，細部に違いは見られるものの，『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』の所収話と同じ構造をしていることは誰の目にも明らかであろう。こうした構造を持つ「涙を流す小犬」はペルシア語による『シンドバード物語』に伝わっている。ペルシア語版以外の『シンドバード物語』に含まれるのはすべて，さきに紹介したアラビア語版と同じ構造の「涙を流す小犬」である。

では，ペトルス・アルフォンシはこうしたペルシア語版『シンドバード物語』を見たのかというと，そう言い切るのは難しい。なぜなら，ペトルス・アルフォンシは，アラビア語は堪能であるが，ペルシア語を読めたと

7）引用は A.W. Clouston, *The Book of Sindibād*, Privately Printed, Glasgow, 1884, pp. 61–62 による。残念ながら梗概である。

いう証拠がないからである。

アラビア語版とペルシア語版の「涙を流す小犬」の関係はどうなのか？それを解明する手掛かりが，やはりペルシア語版『シンドバード物語』の中にある。その物語を，クラウストンの英訳はやはり梗概であるので，ここではペルシア語版『シンドバード物語』から抜粋して編まれたナハシャビー『トゥーティー・ナーメ（鸚鵡物語）』（1330 年）の第 8 夜「王子と七人の大臣と，邪悪な愛妾のせいで起こった災難の物語」より，第 2 の物語を紹介しよう[8)]。

昔，ある金持ちの商人に色好みの淫らな奥さんがいたのです。ある日のこと，商人は商用の旅に出ました。奥さんは夫の不在を思いがけぬ幸運な授かりものと思い，いそいそと大勢の男たちのもとへ通い始めました。そして，まるで，いくつもの集まりやパーティーをその芳香で引き寄せる花束のような存在になったのです。

しばらくして旅から帰ってきた商人は，町のある地区に滞在し，足の不自由な白髪の老婆を呼んで，その手に現金を握らせると，こう言いました，「私は旅の者で，数日この町に滞在することになった。その数日の暇つぶしの相手をしてくれて，私を慰めてくれるような女の人を誰か連れて来てくれないかね」。すると，老婆はお金を，その商人の奥さんのところへ持っていって，こう言ったのです，「肥えた獲物が手に入ったよ。金持ちの商人がやって来て，数日，この町にいようと思っているんだってさ。美人のお相手を探しているから，さあ，相手をしておあげよ，あんたならできるから，首ったけにしておやりよ」。出向いて行った奥さんは，相手が自分の夫であることを見て取

8）Hermann Brockhaus, *Die sieben weisen Meister von Nachschebi, Persisch und Deutsch*, F. A. Brockhaus, Leipzig, 1845. 邦訳は拙訳，作新学院大学紀要・第 13 号，2003 年，pp. 15–33。これは全 6 話から成る最短の「シンドバード物語」である。

りました。状況を把握した奥さんは，たちまちのうちに何と言えばいいのかを考え出し，頭からチャードルをかなぐり捨てるや，夫の頭を叩き，顎鬚につかみかかり，こう叫んだのです，「ああ，イスラーム教徒の皆さん，不法なこの人の手からわたしを助けて下さい。六ヶ月というもの，この人は商用の旅に出ていたんです，いつ帰って来るのかと思って，わたしは道端で待っていたんです，それが，旅から戻って何日も経つというのに，この人は町の外に滞在して，自分の妻の家のことなど忘れてしまっているんです。もしこの人をわたしたちから，わたしたちをもこの人から遠ざけてくれないのなら，今すぐこの場から裁判官のところへ行って，こんな人とは別れさせてもらうことにするわ」。人々が取り成して一日の猶予を請い，夫が取り繕って言葉を尽くすと，彼女はそこを出て，何事もなかったかのように家に戻ったのです。

この物語は，ほぼそっくりそのままアラビア語版「涙を流す小犬」の後半部分に該当している。ペルシア語版『シンドバード物語』に含まれている 2 つの物語を合わせて作られたものがほかならぬアラビア語版の「涙を流す小犬」であるということは明白であろう。アラビア語版「涙を流す小犬」を 2 つの物語に作り替えるなどということは考えられない。なぜなら，この 3 つの物語からどれか一つを選ぶとしたら，誰しもが迷わずにアラビア語版を選ぶであろうからだ。奸策に長けた取り持ち婆に騙されるだけの，言ってみれば哀れすら誘う愚かな人妻が，相手が夫だと分かった瞬間に，老婆すら舌を巻くような変身を遂げる。まさに，ハラハラさせたのちに，読者を唸らせる見事な出来栄えであると言える。「女たちの悪巧み」を語るにはまさに打ってつけの展開なのである。つまり，ペルシア語版『シンドバード物語』のほうが古い形態を伝えていて，この 2 つの物語を合わせた「涙を流す小犬」を含むその他の版のほうが，新しいものだということである。決してその逆ではありえない。

この事実は，『シンドバード物語』の起源や，10 世紀にイブン・イスハーク・アン・ナディームが『アル・フィフリスト（書籍目録）』に記している広本・小本の問題とかかわることで，今ここで詳述はしないが，結論だけ述べておくと，ペルシア語版『シンドバード物語』（12 世紀のものと 14 世紀のもの 2 種が伝わる）が祖本に連なる広本の系統を伝えており，ペルシア語版からの訳であるトルコ語版を除く他のすべての版は，ギリシア語版『賢人シュンティパスの書』の原典の序[9] に記されているペルシア人ムーソスに源を発する小本の系統であるということである。それは所収話の数からも，語り手に割り当てられている物語数のバランスからも，今問題にしている 3 つの物語の分布状況からも言えることである。ペルシア語版に含まれる 2 つの物語を 1 つにまとめあげたのも，ムーソスであると判断して間違いないであろうと思っている。

少し話がそれてしまったが，このペルシア語版『シンドバード物語』のアラビア語訳があった可能性がある。それはアン・ナディームが記しているアバーン・ラーヒキー（815 年没。ハールーン・アッラシードの宮廷詩人）の訳したものである。アン・ナディームによれば，アバーン・ラーヒキーの訳書の中に「シンドバードの書」がある。今は失われてしまったことと，アバーン・ラーヒキーに触れる 2 か所のうち，1 か所には「シンドバードの書」を記しているが，もう 1 か所では記述がないということから，その事実が疑われてはいる[10] が，ペルシア語版『シンドバード物語』の

9）*Mich. Andreopuli Liber Syntipae*, edidit Victor Jernstedt, St.-Pétersbourg, 1912, p. 3. 邦訳は拙訳『賢人シュンティパスの書』未知谷，2000 年，11 ページ。

10）*The Fihrist*, Ibn al-Nadīm, ed. by B. Dodge, 1970/Rpt. Kazi Publications, 1998. 広本・小本の存在に触れているのは 8・1（p. 717），アバーン・ラーヒキーの「シンドバードの書」を記すのは 4・2（p. 359），記していないのは 3・2（p. 260）。B.E. Perry, *The Origin of the Book of Sindbad*, Sonderdruck aus *Fabula* (Band 3, Heft 1/2, 1950), Walter De Gruyter & Co., 1960, note 66 も参照。邦訳はＢ・Ｅ・ペリー『シンドバードの書の起源』（拙訳，2001 年，未知谷）。

「涙を流す小犬」がペルシア語版そのものからペトルス・アルフォンシに伝わったのではないという推測が正しければ，それはアバーン・ラーヒキーのアラビア語訳を通じてであるとしか考えられないのである。つまり，アバーン・ラーヒキーが祖本であるペルシア語版『シンドバード物語』をアラビア語に訳したのは事実であり，その訳本はペトルス・アルフォンシが『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』を編纂した 12 世紀初頭にはスペインにあった，ということになる。ペルシア人ムーソスによって所収話の削減や統合が行なわれた新たなアラビア語訳の出現はその後のことであり，このムーソスによるアラビア語訳から，シリア語以下の小本系「シンドバード物語」が誕生した。ペルシア語版からの他のアラビア語訳は知られていない。

B・E・ペリーは，ペルシア語による祖本『シンドバード物語』の著作年代を 8 世紀最後の 25 年間，あるいは 9 世紀最初の 10 年間であろうと推測している（前掲訳書 153 ページ）が，アバーン・ラーヒキーのアラビア語訳のことを考慮すると，その前者，つまり 8 世紀最後の 25 年間と考えるのが妥当と思われる。その軸足をペルシアに置いたアッバース朝の第 3 代カリフ，アル・マフディ（在位 775～785 年）から第 5 代カリフ，ハールーン・アッラシード（在位 786～809 年）の時代にかけてである。

では，ペルシア語版『シンドバード物語』に見られる「涙を流す小犬」はどこから来たのであろうか？

これまで見てきた 3 種の物語を，「①犬あり・夫との鉢合わせ」（アラビア語版『シンドバード物語』所収），「②犬あり・若者との逢瀬」（ペルシア語版『シンドバード物語』，ペトルス・アルフォンシ『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』所収），「③犬なし・夫との鉢合わせ」（ペルシア語版『シンドバード物語』，ナハシャビー『トゥーティー・ナーメ』所収）として，類話の分布がどうなっているのかを見てみることにしよう。

まず「①犬あり・夫との鉢合わせ」であるが，これは『鸚鵡七十話』広本・小本のいずれも第 1 話（広本には田中於菟弥訳がある。実は犬は登

場しない。老婆は巧みな言葉で取り入り，何でも言うことを聞くと約束させてから逢い引きを持ちかける。約束を破ることはできないと考えて逢い引きを承知する），ソーマデーヴァ『カター・サリット・サーガラ』（11 世紀）第 13 章「貞女デーヴァスミターの物語」（言い寄る男は複数。犬は人妻の犬。言い寄る男の望みを叶えなかったから犬になったという話を人妻は眉唾とみなし，策略が潜んでいることを見抜き，それを承知で男たちを連れて来るように取り持ち役の尼僧に言う。男たちをこらしめるという別の展開となる），ネフザウィー『匂える園』（15 世紀？）第 11 章等に見られる。

「②犬あり・若者との逢瀬」は，『鸚鵡七十話』広本第 2 話（犬は涙を流さない。犬に異常な敬意を表することで人妻の気を引く），同じく小本第 2 話（母親が犬を連れて，息子の恋い焦がれる皇太子妃のもとを訪れ，私とこの犬は前世で姉妹だったと言う。それ以外は広本とほぼ同じ）。

「③犬なし・夫との鉢合わせ」は，上に紹介したナハシャビー『トゥーティー・ナーメ』第 8 夜第 2 話，カーディリー『鸚鵡物語』（1794 年）第 8 話のほか，ハーゲン『奇談全集』9「老婆の策略」（コンラート・フォン・ヴュルツブルク作。取り持ち婆が主席司祭と人妻を取り持とうとする。司祭に急用ができ，老婆は出会った男に声をかける。夫だと気づいた人妻にどう対応するかを入れ知恵するのは女中）がある。

『鸚鵡七十話』に，先ほどの結論に反して「①犬あり・夫との鉢合わせ」と「②犬あり・若者との逢瀬」が併存しているが，これは上述のとおり「①犬あり・夫との鉢合わせ」から犬を省いたことで可能になっていると言えよう。犬が省かれたのは，仏教あるいはヒンドゥー教においては輪廻転生が至極当然のことであるからであろう。その代わり，約束は破れないから逢瀬を承知するという人妻の反応はあまりにも理知的で，逢い引きという罪を犯せば人間のままでいられるという理解は，今ひとつ説得力に欠ける不自然なものと言える。その点，ソーマデーヴァのデーヴァスミターの反応はまともである。

物語成立の前後関係で問題になりそうなのは『鸚鵡七十話』であるが，現存する広本，小本のいずれも祖本ではなく，のちに派生したものであり，ペリーによれば，『鸚鵡七十話』の著者が『シンドバード物語』を手近に所有していて，そこから物語を抜粋したと考える方が，理にかなっているという[11)]。犬になるのは嫌だという反応は，犬を不浄の動物として忌み嫌うイスラーム圏においてこそ納得できる意味を持つものであり，動物が犬であるという必然性はイスラーム圏でこそ成立すると言える。そうしたことを考え合わせると，この「涙を流す小犬」の物語はイスラーム圏で誕生したという結論に達するのである。それがいつ頃なのかは分からないが，少なくともペルシア語版『シンドバード物語』祖本より古いことは確かであろう。だが残念なことにこの物語は東洋において，単独ではまだ発見されていない。

トーマス・マンが『ファウストゥス博士』第 31 章に紹介した「涙を流す小犬」の物語（②犬あり・若者との逢瀬）が，ペルシア語版『シンドバード物語』祖本に初めて姿を現し，アバーン・ラーヒキーによるアラビア語訳から，ペトルス・アルフォンシ『ディスキプリーナ・クレーリカーリス』に採用されてヨーロッパに伝播したという経路は，残念ながら推測も含んではいるが，以上のように考えるのが今のところ最も合理的であると言える。ペトルス・アルフォンシゆかりのアラゴン王国の蔵書や修道院の図書館を隈なく探せば，あるいはアバーン・ラーヒキーによるアラビア語版が見つかるかもしれない。

この物語を受け入れたのは『ゲスタ・ロマノールム』ばかりではなかった。ジャック・ド・ヴィトリ『例話集』250，ヴァンサン・ド・ボーヴェ『道徳の鑑』3・9・5，クレメンテ・サンチェス『説話の書』302，『スカーラ・ケーリ』515，ルグラン『古ファブリオー』4・50–54，イギリス中世のファブリオー『シリス夫人』，パウリ『冗談とまじめ』873，ハンス・ザックス『泣く小犬』（謝肉祭劇 61）などを通じて，全ヨーロッパに伝わ

11）B.E. Perry, a.a.O., pp. 39–40. 邦訳では 61–63 ページ。

っていったのである。

さらに，この物語はシュタインヘーヴェルの『イソップ寓話集』に「アルフォンシ抄」11 として採り入れられ，その系統のイソップ寓話集の一本がわが国にまで伝わって，わが国初の西洋文学の翻訳であるキリシタン版『エソポのファブラス』と古活字版『伊曾保物語』が生まれるのであるが，残念ながらその際に「涙を流す小犬」は省かれてしまい，この物語がわが国に伝わることはなかった。

最後に，関連があるのかどうか判断をしかねているのだが，次のような民話があるので紹介しておこう。

> 腹を減らした乞食が川で休んでいる牛を見て，あんな牛を持っていたら乞食をする必要はないのにと思う。ある計略を考え，唐辛子をつぶして牛の目にこすりつけると，牛は涙を流す。乞食は牛に向かって，「父さん」と言って泣く。牛の持ち主が，どうしたのだと思ってやって来ると，乞食は，この牛は前世で自分の父親だったのだと言う。本当かと聞く持ち主に，乞食は，前世で良いことをしなかったからこんなことになったと泣く。牛の持ち主はそれを聞いて良いことをしたくなり，乞食に牛を与えて，孝養を尽くせと言う[12)]。

動物に涙を流させ，その動物を自分の縁者だと相手に思い込ませるモチーフは同じであるが，共通点はそれだけであり，ここで語られているのは，その涙を流す動物そのものを手に入れるための策略であって，動物を使って別のものを手に入れるという話ではない。どのくらい古い民話なのかも分からないが，相当古いものだと仮定するならば，これが西に伝播して

12）蕭山市民間文学弁公室編『中国民間文学集成浙江省杭州市蕭山市巻』（蕭山市民間文学弁公室）1989 年，338–339 ページ。斧原孝守氏の御教示と梗概による。

「涙を流す小犬」にヒントを与えたと考えることは可能かもしれない。しかし，今のところ，不確かなことであり，単なる偶然の一致と見ておくほうがいいと思われる。